

American Puritanism とその文学的遺産 (その 2)

—女流詩人—

Anne Bradstreet と Emily Dickinson

吉 津 成 久

本稿は、前回発表した『American Puritanism とその文学的遺産—植民地時代—Anne Bradstreet と Edward Taylor』（「英米文学研究」第13号…梅光女学院大学英米文学会発行）に継続するものであり、昭和55年度九州アメリカ文学会セミナーで口頭発表した『Anne Bradstreet (1612—1672) as a Woman Poet In the Puritan World』（昭和55年5月10日。於福岡アメリカンセンター）を新資料をもとに加筆修正したものである。

ロイ・ハーヴェイ・ピアスは、その著書『アメリカ詩の連続性』（Roy Harvey Pearce, *The Continuity of American Poetry*）の中で、アン・ブラッドストリートの詩が、アメリカ国民が共有する体験（a communal experience）に基づいていないことから、彼女を真の意味でアメリカン・ピューリタン詩人の仲間に入れることはできない、と述べている¹⁾。ピアスがここで言及している「アメリカ国民共有の体験」とは、ニューイングランドにおける政治上の、あるいは宗教上の生活に君臨する男性の体験であって、彼によれば、それがアメリカ詩の「連続性」の基礎を形成したというわけである。たしかにピアスのいう通り、ブラッドストリートの詩の中で、そのような体験をテーマとしてあつかっているのは、『旧イギリスと新イギリスとの対話』（*A Dialogue Between Old England and New*）ぐらいであり、彼女の『四王国』（*The Four Monarchies*）にしても、そこで扱われている歴史は、アメリカ史でもなければ、ピューリタンを新世界に移住せしめたいきざつについては触れていない。しかしながら、ピアスの論に対して、ブラ

ブラッドストリートの詩を論ずる過去の批評家が見すごしてきたもう一つの共有体験を挙げる批評が最近あらわれ、ブラッドストリートの詩に対する新たな興味を旨めさせてくれたのである²⁾。この女性批評家によれば、「もう一つの共有体験」とは、女性の体験であり、それは、ブラッドストリートの詩全体に流れているばかりでなく、現代に至るアメリカ女流詩人の作品の底流をなしている。まさに、ブラッドストリートは、ピアスに対抗して表現するならば、アメリカ女性詩の「連続性」(continuity)を築いたパイオニア的存在といえよう。それは、次の三つの要素に分けて言及される。第一に、ブラッドストリートの詩は、歴史的展望に立って、女性の賛美はもちろん、女性の精神的特質、関心事を啓発した点で注目に値するものであり、女性を歴史的見地から論ずることは、後世のアメリカ女流詩人によって継承されてゆくのである。第二に、ブラッドストリートは、多くの母子関係をうたった詩をのこしているが、これは、後のアメリカ女流詩人の伝統となっており、しかも、彼女は、家庭内のリアリスティックな場面が、詩のイメージとトピックスの材料となりうることを見事に実証した点において、アメリカ女性詩のパイオニア的存在である。また、彼女の、夫に捧げた愛の詩は、標準的なピューリタン詩からの大胆な脱皮である。第三に、彼女の、神と自然に直接触れる体験を持ちえないことからうまれる精神的葛藤は、後世のアメリカ女流詩人の主要テーマとなっている。

第一の点については、前回多少とも触れておいたので(「英米文学研究」第13号)、今回は、第二、第三の点、また「死と永生」のテーマについて、アン・ブラッドストリートとエミリー・ディキンソンを比較しながら、アメリカ女性詩の「連続性」を論究してみようと思う。

ブラッドストリートは、「母性」というものが、女性であることの最も主要な部分であることを深く認識していた。子供を扱った彼女の詩や散文の中に見られる「誠実さ」とか「女性特有のリアリズム」(feminine realism)は、どの批評家も認めるところである。彼女のように、観念化された子供像ではなく本物の子供をまじめな詩の題材として取上げる詩人は、とくに

男性の場合、居なかったとってよい。例えば、シェイクスピア、ワーズワース、エマーソン、またホイットマンの詩に登場する子供たちは、リアルではない。ブラッドストリートの『四年令』(*The Four Ages*)にあらわれる子供は、母親にまわりついたり、むづかったりする彼女自身の産んだ子供である。しかし、こうしたリアリスティックな描写がいつの間にか普遍的な子供像に昇華されてゆくのは、彼女の非凡な才能を物語っているといえよう。

わが母の、子を産む苦しみについて話すのは、ひかえよう、
彼女の九ヶ月間の、つらい重荷のことはいうまい。
お腹に子を宿す苦しみを私がいうのはおこがましいこと、
口ではいえぬあの痛みを話すのは。
泣きながら私はこの世に生れてきた、
私が成長するのにひきかえ母はおとろえていくばかり、
だが深い慈愛をもっていやな顔一つせず、
私のためなら身をこなにして尽くしてくれた、
わがままな泣声をあげては、私は母を休ませなかった。
それでも母は私を胸に抱いてなだめてくれた、
疲れた腕をのばしておどったり、それにあわせて歌ってくれた、 …
…
(*The Four Ages: Childhood*)

既にここには、ただ子供を描写するのではなく、母と子の関係を表現しようという試みがみられる。この初期の詩の後、子供を扱ったブラッドストリートの詩は、ますます個人的色彩が濃くなっていく。孫を詠んだ三つのエレジーは、伝統的なエレジーの形式をふんではいるが、反面、当時のピューリタンが詠んだ大多数のエレジーが、政界や宗教界の重要人物とか信仰心の厚いその夫人の死を扱っているのに対して、彼女のエレジーは、一貫して赤んぼの死を題材にとり上げている。もう一つの際立った特徴は、ブラッドストリートのエレジーには幼子を失くした両親像が全く存在

しないか、きわめて希薄である、ということである。とくにそれは父親像についていえることである。ブラッドストリートは、これらのエレジーを、子供を失った両親の慰安という本来の目的からはずれて、彼女自身に対する神の御心を正当化する手段として使っている。

この世に来たと思ったら行ってしまい、ねむりについてしまった、
お前と知りあって日は浅く、おまてとの別れは私たちを泣かせた。
三つの花のうち、二つはほとんど咲かないうちに、最後の一つはつ
ぼみのうちに、
全能の神の御手によって刈りとられた。だがあの方は良い方なのだ、
あの方の前では、畏敬の念をもち、口ごたえをすまい。
それがあの方の意志だったのだ、どうして？ などと問いかけま
い、
へりくだった心をもち、口をつつしんで、
あの方は正しく、かつ慈悲深い方だといおう。
あの方は、私どもの方へ帰ってこられ、わたしたちが失ったものを
償って下さり、
わたしたちが厳しい試練を克服した後、きっとほゝえみかけてくだ
さるだろう。
行きなさい、かわいい赤ちゃん、二人の姉さんとお休みなさい。
祝福をうけた人たちといっしょになり、永遠の喜びにひたりな
さい。

*(On my dear Grand-child Simon Bradstreet Who dyed on
16, November 1669, being but a month and one day old)*

自分自身に対する神の御心の正当化は、上に挙げた例からうかがえるように、きわめてぎこちない印象をぬぐいきれない。彼女が、「死」を受け入れることに何ら問題意識をもたなかったとしても、神の御心を素直に受け入れることには相当煩悶したようである。

子供のことを詠んだブラッドストリートの詩の最も重要な特質は、父親像というものがきわめて希薄であるということである。アンとサイモンの結婚が、愛に貫かれた幸せなものであったにちがいない、ということは批評家の一致した意見ではあるが、子供に関する詩にしても、夫サイモンに捧げる愛の詩にしても、夫の、父親としての役割については、一言もふれていないのは何故か？一子を授かる以前に詠んだ詩の中で、アンは夫サイモンに、自分が死んだら子供たちを継母から守ってほしいと頼んでいる (*Before the Birth of One of Her Children*)。彼女は、真剣に、子供たちと継母 (step mother) の関係を憂慮している。一つには、夫サイモンは、マサチューセッツ植民地の総督という要職にあり、そのため本国イギリスにたびたび出張し、何ヶ月も家を空けることがあったためであろう。しかし、彼女の詩からうかがえるもっと大きな理由は、女性としてのプライドからうまれたものでであろう。彼女は、女性として最も主要な役割は、母親としての役割であることを強烈に意識していた。したがって、簡単に他の女性によってその座を奪われることは、彼女の存在価値を失うことを意味していた。

ブラッドストリートの異常なまでに強烈な母親としての自我意識と、夫サイモンの父親像の希薄さは、単に個人的な夫婦関係を越えたピューリタン社会という大きな精神的風土に起因しているものとおもわれる。夫に捧げた愛の詩の中で、ブラッドストリートは夫を深く愛していると公言しているし、彼の不在を嘆いている。しかし、前に挙げた Watts (前掲註(2)) も指摘しているように、二人の関係は、どう見ても、血の通った男と女の間柄とか、卑近な具像性に欠けている。ジョン・ダンばりの観念化された愛の絆を詠むばかりで、愛する男のイメージはリアルにつたわってこないし、愛の焰は強烈さを秘めていながらついに燃えあがることはない。

二人で一人になるとすれば、私たちこそ、ほんとにそうなんです、
夫が妻に愛されるということがあれば、あなたです、
妻が夫に幸せを見いだせるというのであれば、
女たちよ、できるなら、私とくらべてごらんさい、

私はあなたの愛をとうとぶ、金山を集めたよりも、
また東洋にある、すべての富よりも。
私の愛は河川も消すことができず、
あなたの愛以外に報いるものもない、
あなたの愛は私がどんなにしてもお返しのできないものだ、
天がいく重にも報いをあげてくださるようにと私は祈る。
それから愛の中に二人が生きる間辛抱して、
もう生きることのなくなった時永久に生きるようにしましょう。

(To My Dear and Loving Husband)

ブラッドストリートの、夫に対する愛と神に対する愛は、一つの幹から出たものである。彼女が、後年、余裕をもって子供に書き残した言葉の中に、アメリカ移住当時彼女が陥った信仰の危機を如実に物語るものがある。例えば、彼女は言う。「私は、自分の信仰のさ中において、神のしもべならば大ていの者が味わうあの不断の喜びや清新な気持を味わえず…反対に、何度も気が滅入ったり、意気消沈して、時には感じたこともあったあの至福を味わえず、たびたび当惑した。しかし、たとえ私が暗黒の中に居て、一条の光も見出せない時でも、私は自己を主にゆだねたいと願った。……幾度となくサタンがあらわれて、聖書の真実性について私の心をぐらつかせた。また、無神論的考えがあらわれて、神が存在するかどうして知りえようか、自分を納得させる奇跡を見たこともないではないか、私が読んだ内容は作話でなくてどうして知覚できようか、といったような考えが何度も私の心をとらえて悩ませた。……神が存在するという事は、私の理性にしたがえば納得できる。この目に見える驚異的な神の造作、天地の広大な枠組、万物の秩序等々によって。」また、彼女は、当時のピューリタン社会にあっては、異端的とも、反逆的ともいえる発言をしている。「どうしてカトリック教が正しくないのか？ 彼らとて同じ神、同じキリスト、同じ言葉を持っているのではないか。ただ解釈の上で、彼らとわれわれは異っているにすぎない。」彼女のこうした無神論的、ある

いは、理神論的発想は、後世のアメリカ女流詩人、例えば、エミリー・ディキンソンにも通じるものである。ブラッドストリートの信仰の危機は、初期にとどまるものではない。後期の『観照集』(Contemplations)においても、彼女は神とのへだたりを感じ、大自然を通じて神の真意をうたいあげることのできない自己の無能さを嘆いている。(ピューリタン詩人の使命は、まさに神の御心をうたいあげることにあつた。) 例えば、スタンザ9では、

その時わたしは、きりぎりすの陽気な声を聞いた、
黒装束のおおろぎが、第二声部をうけもち、
かれらは一つの旋律を同じ弦で演奏した、
その粗末な芸術にほこりをもっているかのよう。
卑しき生物が、かくも声高らかに歌いあげようというのか？
彼らは彼らなりに造り主をほめたたえる。
それにひきかえこのわたしは啞も同然、かれらほどにも高らかに歌うこともできない。

(Contemplations, stanza 9)

ブラッドストリートの『観照集』は、よく、「前ロマン主義」という批評を与えられる。しかし、彼女の『観照集』には、たとえばヘンリー・デヴィッド・ソロウの *Walden* に見られるような、大自然や神との親密な一体感がつたわってこない。

それでは、これまで挙げてきたブラッドストリートの詩の特質、すなわち、彼女のエレジーにおいては、子を失った両親像は描かれず、むしろ、自己に対する神の御心の正当化を表わす手段として使われ、神の御心を納得しようという気持がはたらいていること、第二に、子供に関する詩では、母子関係のみがクローズ・アップされ、父親像がきわめて希薄であること、第三に、夫に捧げた愛の詩では、血の通った夫婦関係が感じられぬこと、最後に、『観照集』からもうかがえるように、神と自然との一体

感、共感がくみとれないこと、こうした特質をうみだした原因はいろいろ考えられるが、なかでも、最大の源泉は、ピューリタンの結婚観であろう。

ジョン・ウインスロップは、1645年、「新世界における市民の自由は、神政国家に対する服従によって約束されるものであり、それは、女性が夫に服従する時に約束される自由と同質のものである」と述べている。さらにつけて彼はいう。「その自由は、権威に対する服従をとおしてこそ維持され、実効する。それは、キリストがわれわれを自由にしてくださったのと同質の自由である。女性は、そのような男性を夫に選ぶべきである。そして、こうして選ばれたからには、彼は彼女の主 (lord) であり、彼女は彼に服従すべきである。ただし、それは、束縛という意味ではなく、自由という意味においてそうすべきである。真に妻らしい妻とは、彼女の服従を名誉とも自由とも考えられる女性を指すのであり、夫への服従によってのみ、わが身の境遇を安全とも、自由とも考えられる女性のことをいう。」³⁾つまり、ウインスロップによれば、妻の夫に対する関係は、夫のキリストに対する関係と同質なのである。この図式は、ピューリタンの契約的結婚観によって裏づけされたもので、大下尚一氏によると、ピューリタンは一般に、愛したゆえに結婚したのではなくて結婚したゆえに愛した。かれらは、人間がいつくしむ一切のものに優越する神への忠誠を強調し、結婚は、神のもとにおける共同の事業となった。したがって、妻が夫を愛する理由は、第一に、夫が神を愛しているからであり、第二に、妻である自分を愛しているからであった⁴⁾。

このピューリタンの契約的結婚観は、神と男性を恋人としてとらえる詩を、ピューリタン女流詩人に書かせる動機となった。神を恋人とちらえる詩は、いろいろなイメージによって、男性への愛を詠んだ一連の詩と関連づけられる。前回にも述べたように (『英米文学研究』第13号 pp. 190~194)、ブラッドストリートの、夫に捧げた愛の詩や、その他の詩においては、キリストと夫を恋人としてとらえるために「太陽」のイメージが用いられ、彼女自身には、「大地」のイメージが用いられている。神 (キリス

ト) ——太陽——夫というこのパラレルな関係は、罪の烙印を押された人間という観念がつかまとうピューリタン社会の壁にぶつかりながらも、神(天上)と人間(地上)の結婚によって永遠に保証された恩恵の契約を限りある人生のよすがとする詩人の胸の内をあらわしている。神と男性(夫)を恋人としてほとんど同一のレベルに置き、それに服従する自己との関係を、「太陽」対「大地」のイメージとしてあらわし、「隔合」とともに「対立」の観念をうち出しているのであるが、彼女の激しさは、「対立」「融合」いずれの場合にも異常に目立っている。後期の詩においては、「融合」の観念に強勢が置かれているが、その直後に時折「対立」の観念が顔をのぞかせている。それはとりもなおさず、Puritan Orthodoxyの壁の中であって、それから精神的離脱をはかりながらも妥協を余儀なくされる詩人のジレンマであり、soulとbodyの葛藤がうずまいているといえよう。

「太陽」対「大地」のイメージと同じ意味をもっているものとして際立っているのは、「水」に関係するイメージであり、特に、「川」対「海」「小川」対「大河」の関係は注目に値する。ブラッドストリートの『観照集』(Contemplations)第22スタンザから第25スタンザでは、神と男性という二種類の対象に向けられる愛を結びあわせているイメージとして、「大河」(神または男性)に注ぎこむ「小川」(詩人)、あるいは、「海」(神または男性)に注ぎこむ「大河」が用いられている。まずスタンザ22では、詩人は、今、「音もなく流れる川」(the stealing stream)に自己をなぞらえている。その川は、「あこがれの大洋に向かって進んでいるのだ」(Which to the long'd for Ocean held its course,)、つまり、彼女の神、あるいは、彼女の恋人が待ちうけている所に向かって進んでいるのだ。次のスタンザ23では、詩人は、「百にもものぼる小川」(hundred brooks)、「わたしの小川たち」(my Rivolets)と一つになって、「手に手をとって」(hand in hand)、「大河とともにすべってゆく」(along with thee they glide)。その先行は、「テティスの家(海)」(Thetis house)、「あの永遠に祝福された大邸宅」(that vast mansion, ever blest.)である。つづくスタンザ24と25では、状況は、喜びから恐

怖へ急転する。詩人は、自己を「自由気ままな小魚」(the wantons frisk) に
なぞらえ、冒険心をおこして「まっすぐにもっと冷たい底にもぐってゆ
く」(Then to the colder bottome streight they dive), あの「ネプチューンの
透明な館に」(to *Neptun's glassie Hall*), そして、そこで、大魚の餌食にされ
てしまう。

エミリー・ディキンソンは、初期のいくつかの詩の中で、「水」のイメ
イジを用いて、ブラッドストリートと同じ状況を表現してみせる。No. 52
では、「海」の怒濤に翻弄され、あくまでも「従順な」(docile)「小船」
(bark), 「海」に吸収される「従順な」(docile)「川」が描写されている。
「川」(女)は「海」(神または男性)によって「従順な妻」(a docile wife)に
変貌する。(She rose to His Requirement—dropt / The Playthings of Her Life/
To take the honorable Work / Of Woman, and of Wife— / …It lay unmentioned
—as the Sea / Develop Pearl, and Weed, / But only to Himself—be known / The
Fathoms they abide…No. 732) 男性なる神、男性なる恋人を象徴する「海」
の中に没入せしめられ、個性を喪失することは、詩人ディキンソンの強迫
観念になっている。その最も典型的な例が No. 520 である。犬を連れて
海浜を訪れた詩人は、海底に住む人魚に見据られ (The Mermaids in the
Basement / Came out to look at me—), あやうく引きずりこまれる危機感を
抱く。フリゲート艦の上甲板から、砂州に孤立した二十日鼠でもとらえる
かのように、手指のようにわかれた麻縄が飛んでくる (And Frigates—in the
Upper Floor / Extended Hempen Hands— / Presuming Me to be a Mouse— /
Aground—upon the Sands—)。“Hempen”には a halter (絞首索) の意味が
ある。やがて潮が満ちてきて、靴、前垂れ、ベルト、ボディスへと侵水し
ていく。潮が、たんぼぼの莢にのったひとしずくの露のように私をひと飲
みしようとした瞬間、私はハッとなって逃げ出す。潮は、ひたひたと私を
追いかけ、誰も知合のいない町中 (No One He seemed to Know—) にはいる
と、物凄い目つきで睨み付け、やっとな身を引く (And bowing—with a
Mighty look— / At me—The Sea Withdrew—)。

ディキンソンの自我の主張は、ある場合は、神に対する激しい苛立ちと

か擲論となってあらわれる。例えば、「夜盗！ 銀行屋——父！」（“Burglar! Banker—Father!”…No. 49）、「物言わぬ王」（“King, who does not speak” No. 103）、「詐欺師」（“Swindler”…No. 476）などである。一方、彼女の自我主張は、「私は何を考え、感じ、知るか？」（What do I think and feel and know）という自省に終る場合もある。それはちょうど、ブラッドストリートが信仰の危機に陥った時に、「私は、かく自分自身と議論しました」（I have argued thus with myself.）と語った如く、結局自省に頼ったのと同じである。

ニュー・イングランドが産んだ二人の女流詩人、アン・ブラッドストリート（1612～1672）とエミリー・ディキンソン（1830～1886）は、文学に結晶したアメリカン・ピューリタニズムの伝統を考察するうえに欠くことのできない存在である。前者は、1630年、ジョン・ウインスロップのひきいるマサチューセッツ移民団に加わって開拓間もないニュー・イングランドの荒野に渡り、『最近アメリカに出現した第十詩神』（*The Tenth Muse Lately Sprung Up in America*）と題する詩集の初版本によってピューリタン文学に先鞭をつけた。一方、後者は、二世紀を経て、アメリカ社会の大きな変動期である鍍金時代に生涯を送ったが、実際には時代の流れに逆らっていて、彼女の属した精神的環境は、植民地時代のニュー・イングランドと多分に共通した点をもっていた。

ブラッドストリートの詩集の初版本が、彼女を尊敬する義弟によって知らぬ間に1650年ロンドンで発行された時、彼女は、自分があのギリシャの九詩神（女神）の仲間に加えられたことで大いに当惑した。彼女の作品は、人目にふれるためとか、詩作に快楽を求めるといった気持からではなく、自己の魂との対話や、子供に贈る母の魂の遺産として書かれたのである。これは、ピューリタン文学の特徴の一つである内省的な性格を示すものであり、ブラッドフォードやウインスロップの『歴史』や『ジャーナル』とともに、ブラッドストリートの詩作は自らの信仰を確める「告解」の役割を果していた。

一方、ニュー・イングランドのアマースタの自宅の二階に引きこもっ

て、1775篇にのぼる詩を人知れず書きつづけたデイキンソンは、プロフェッショナル・ポエトでもなく、またアマチュアでもなく、プライベート・ポエトであった、と称せられている。このように、創作態度の面において、両詩人の間には、ピューリタン詩人として共通性が見られるのであるが、それは、両者の創作動機についてもあてはまるのではなからうか。

私が考えるに、「死」と「永生」に対する深い関心が、二人の重要な創作動機となったようである。両者がともに「死」に心を惹かれる原因については種々挙げられるが、何といても第一に、宗教的要因が挙げられ、それを支えた強力な「父」の存在がある。ブラッドストリートは、新しい植民地の総督となった父の下に十分な教育を受けた。父トマス・ダドリーは、エリザベス I 世の治世のもとでフランスと同盟したイギリス軍の一兵士として対スペイン戦争に出征した経験と、幅広い学識、教養、厳格なピューリタン気質を活かして、渡米後は、裕福な財力と慈悲でもって事柄を処す紳士ウインスロップと勢力を二分するほどにまで出世し、やがて植民地史に永遠にその名をしるすことになる。このように、文武両道にすぐれ、質実剛健の気風を備えた父のことを、ブラッドストリートは、『一愛国者に捧げる碑文詩』(*Epitaph on a Patriot*) の中で、「歴史を動かす武器庫」(A magazine of history) と称している。

一方、デイキンソンの祖父は1821年にアマースト・カレッジを創立し、ピューリタニズムの伝統が強く根を張る基礎を築いた。彼女の父や兄をはじめ宗教的に活躍する多くの人物はこの大学の出身であるが、特に父は、「父が歩く時は、まるでクロムウェルが歩いているようだった」と彼女が回想するほど、ピューリタニズムの具現であった。

このような環境で育ったブラッドストリートとデイキンソンにピューリタニズムの思想が深く浸透したのは当然である。ピューリタンは、来世を信じ、この現世における財力や名声を望まない。ここに二人の詩人が「死」と「永生」に大きな関心を抱いたゆえんがある。さらに、この関心をいやがうえにも駆立てたのは、両者ともに、実際の死を見聞する機会が多かったという事実であろう。ブラッドストリートは、結婚して渡米する

直前、すなわち16才頃、天然痘にかかり、その瘵が後遺症として残り、また、渡米後は、結核に似た長わづらいにかかり、それとともに跛になった。また、当時の植民地では、多くの若い生命がうばわれていった。ブラッドストリート家でもその例外ではなく、1669年から1670年にかけては、長男サミュエルにとって大変不幸な時期で、彼が公務でロンドンに出張している間に、妻のマーシーが未熟児を産んで間もなく死に、また、その未熟児も後を追うように死んでいった。5人の子供のうち、生き残ったのはただ一人、1667年に生れたマーシーという女の子だけであった。1才半で世を去った長男サミュエルの長子エリザベスに捧げるエレジーで、ブラッドストリートは、次のように詠んでいる。

1

さようなら、わがいとしの赤ちゃん、
わたしの心を充分すぎるくらい満足させる者、
かわいい赤ちゃん、わたしの目をよるこぼす者よ、さようなら、
この地上を借りてしばしの間咲いていたが、
摘みとられて永遠の世界へもち去られた美しい花よ、
さようなら、神の祝福を受けた赤ちゃん、
どうして私はお前の運命を嘆き、こんなに早く命が燃え尽きたことを
悲しむことがあろうか、
おまえは、永劫の都におちついたのだから。

2

木というものは、成長すれば自然に枯れるもの、
プラムもリンゴも、熟しきってしまえば落ちるもの。
時は、強く高いものを亡ぼすもの。
だが、新しい苗は、やがて根こそぎ取られるために植えられ、
はじめて開いたつぼみも、ほんのしばしの命を保つだけ、
それもこれもただ、自然と運命を司る方の手によるもの。

第2スタンザの1～4行までは、「天の配剤」「時」の暴虐に対する諷

念があらわされているが、But ではじまる5～6行は、神意に対する激しい反発が顔をのぞかせる。だが最後の行では、急激に、造物主への服従によって己れの我がままをぬぐいさそうとする。ブラッドストリートの他の作品にも見られるように、彼女の内側には、自然な情愛の焰が燃えているのである。だが、彼女は、人生が割り切れない、辻褃の合わないものだと感じながらも、神の方から見れば、辻褃が合うのだと、自分に納得させようとつとめている。

デイキンソンの場合にも、当時、特に天然痘とコレラが猛威をふるい、若い命が失われていた。さらに、彼女が死をいやでも意識したのは、村の墓地が実家のすぐ近くにあり、死の現実をまのあたりに見ることが多かったことと、南北戦争による近親者の死であった。1862年頃、彼女は次の詩を詠んだ。

わたしは思う、
 この世ははかなく
 苦悩がすべてで
 痛手に満ちていると、
 だがそんなことが何だろう

わたしは思う、
 わたしたちはやがて死に、
 どんなに若々しい力も
 やはり朽靡には克てないと、
 だがそんなことが何だろう

わたしは思う、
 天国では
 いずれすべてが公平にされ
 新しい均分にあずかると、

だがそんなことが何だろう

「だがそんなことが何だろう」(But what of that?) と各スタンザの最後に置かれるリフレインが、「永生」に対するデイキンソンの立場を痛烈に物語っている。彼女の時代には、こういう問題は永久に解決できない問題として、ただそれを知性や感性といった現実的な体験によって表現することしか残されていなかった。彼女の詩が、「死」と「永生」についての外面的現実を模索しているのに比べて、ブラットストリートが、高次の視野から受け入れようと努力していることは注目に値しよう。ただ、ピアスも指摘するように、両者ともに、「死」を現実 (fact) として認めていることは間違いなく、ホイットマン、エマーソン、あるいは、ポウといった男性詩人のように、「死」を超絶する者 (transcendent) となったり、「殉教者」として英雄的存在となったり、森への逃避者となったりはしない⁵⁾。ここでも、両者が、女流詩人として、もう一つのアメリカ詩の連続性 (continuity) という路線に上にあるということが証明される。

註

- 1) Roy Hervey Pearce, *The Continuity of American Poetry*, (Princeton: Princeton Univ. Press, 1961), p. 24.
- 2) Emily Stipes Watts, *The Poetry of American Women from 1632 to 1945*, (Austin and London: University of Texas Press, 1977), pp. 3-20.
- 3) John Winthrop, *Winthrop's Journal: "History of New England," 1630-1649*. Edited by James Kendall Hosmer. 2 Vols. (New York: Barnes and Noble, 1959), 2: 239.
- 4) 大下尙一編, 講座アメリカの文化 I 『ピューリタニズムとアメリカ——伝統と伝統への反逆——』(南雲堂, 1969), pp. 11-12.
- 5) Pearce, *The Continuity of American Poetry*, p. 24.

なお、作品および書簡集のテキストは、次のものを参照した。

Ellis, John Harvard ed., *The Works of Anne Bradstreet, in Prose and Verse* (Reprint), (Mass.: Gloucester; Peter Smith, 1932).

Jeannine Hensley ed., *The Works of Anne Bradstreet*, (Mass.: Harvard University Press, 1967)

Thomas H. Johnson ed., *The Complete Poems of Emily Dickinson*, (Boston: Little, Brown, 1960)

Thomas H. Johnson ed., *The Letters of Emily Dickinson*, 3 vols., (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1958).